

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	小泉由美子
<p>主 論 文 題 名 :</p> <p>College upon a Hill: The Rise of the American Epic in the Age of the Connecticut Wits (丘の上の学府——コネティカット・ウィッツの時代における叙事詩の生成)</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本博士論文は、独立戦争期の学匠詩人グループ「コネティカット・ウィッツ」の叙事詩を扱いながら、その「友愛の詩学」とそれが不可避免的に包含する「裏切りの恐怖」が、同時代的言説といかに密接な関係を切り結んでいたかを検討する。</p> <p>その際、本博士論文は、独立戦争を突発的契機の一つとして「アメリカの叙事詩」が生成された、という視点を主軸とするが、それは必ずしもコネティカット・ウィッツの叙事詩が、旧大陸の叙事詩と比較して「アメリカ的独自性」を保持していたという主張を意味しない。なぜなら、彼らの作品は、旧大陸とりわけイギリス文学に深く依拠し、ゆえにしばしば例えばミルトンないしポープの「模倣」として映り、「アメリカ的独自性」、あるいはのちのアメリカン・ルネサンス作家も希求した「アメリカの文化的独立」、を見出すにはあまりに不十分である事実は否めないからだ。</p> <p>しかしながら、彼らの文学運動を駆動させた「精神」は、アメリカの歴史的ないし同時代的な文脈において、極めてアメリカ的と言える。なぜなら、彼らの「文学的使命感」は、ピューリタン植民地時代、たとえばジョン・ウィンスロップの「キリスト教慈愛の雛形」における「丘の上の町」のヴィジョンが象徴する「使命感」を基盤にしながら、十八世紀後半独立戦争期においては、エモリー・エリオットが言う「バークレイ的な丘の上の文化都市」のヴィジョンと共鳴しながら育まれたものだからだ。ジョージ・バークレイは、同時代イギリスの社会・政治に失望し、「帝国ないし学問の変遷」の思想に基づき、その「最後の帝国・文化的繁栄」をまずはバミューダ諸島に、のちにアメリカに幻視した結果、渡米、イエール大学に莫大な思想的・物理的・知的財産を残す。「丘の上の町」から「丘の上の文化都市」へ、そして「丘の上の学府」へ、本博士論文が目論むのは、独立戦争期、とりわけコネティカットのイエール大学において、「丘の上のヴィジョン」がどこよりも強力に胚胎されどこよりも強力に開花せんとした、その極めてアメリカ的な文化的・文学的現象を捉える試みだ。</p> <p>以上の視座から、本博士論文は、「友愛の詩学」を上記コネティカット・ウィッツの文学的使命感を駆動させた主たる要素、ないし不可欠の「修辞」として位置付ける。それを「修辞」とみなすことは、同時代においていかに人間の感情が政治化され、いかにそれがその根本に「裏切り</p>			

の不安」を胚胎させていたかを浮き彫りにする。無論、この「友愛の詩学」は、上掲ウィンスロップの「キリスト教慈愛の雛形」に既に見られるものであり、旧大陸由来の啓蒙思想をその発展の礎とするものの、独立戦争というアメリカ的文脈が、「裏切りの恐怖」を増大させ、その「友愛」を急速に修辞化政治化させた。というのも、独立戦争期における「王党派」が「裏切りの恐怖」の鍵となるからだ。

コネティカット・ウィッツの友愛の詩学は、独立戦争期における「王党派」の記憶を契機の一つとする。本博士論文の第一部（“The Trauma Epic”）が浮き彫りにするのはこの事実他にない。アメリカの叙事詩研究において、その端緒に位置付けられることの多いティモシー・ドワイトの『カナン征服』（1785年）は、単に独立戦争の勝利を謳ったものに留まらない。ピーター・ケイファーが正しく指摘するとおり、そこには王党派の記憶が、とりわけ王党派であったドワイトの父親の姿が深く影を落とし、そうした父親を家族内部に抱えてしまった詩人自身の苦悩が刻まれる。イエール大学での日々をドワイトと極めて親密に過ごしたジョン・トランブルが、その友人の苦悩を知らぬはずもなく、しかし安易な共感を示すこともなく、しかしながら、独立戦争期を題材とした自身の（擬似）叙事詩『マクフィンガル』（1782年）において、王党派ないしトーリー派である「マクフィンガル」を主人公に据えたとき、その「国家的裏切者」に対する問題意識を否応なく露呈させる。そこでは、単に王党派を「裏切者」として前掲化するだけでなく、むしろ王党派を裏切者とみなすことによってその「独立へ至る道」を正当化せざるを得なかった、初期アメリカの歴史それ自体が抱える「欺瞞性」を暴露する。

こうした「欺瞞」は独立戦争後、抑圧される。しかし、意識するにせよしないにせよ、独立戦争をめぐる「負の記憶」は、その反復を恐れるあまり、その精神を正しく継承する「民主主義」に警戒を抱かせ、「安定」「秩序」を優先する「連邦主義」を、コネティカット・ウィッツを始めとした知識人に流布させる。この時代、「連邦主義の時代」と呼ばれるゆえんであり、本博士論文の第二部（“The Gothic Epic”）が基礎とする視座だ。知的自負心と民主主義への恐怖は、彼らの代表作と言ってよい『アナーキアッド』（1786–87年）において顕著である。しかしながら、連邦主義の時代は短命であり、1790年代には共和派との対立を深めていく。同時代の社会言説はコネティカット・ウィッツの集団的有り様それ自体も大きく変容させる。第二部後半は、現代においてほとんど忘却された詩人レミュエル・ホプキンズの「ギロチーナ」（1796–99年）を扱うが、本作が秘密裏に胚胎させるのは、コネティカット・ウィッツの「裏切者」ジョエル・バーロウへの友愛だ。ジョエル・バーロウは、前掲『アナーキアッド』の共同執筆に加わったものの、1788年の渡仏後、共和主義に転向する。これは連邦主義の立場をとるコネティカット・ウィッツにとって、裏切り行為の何ものでもなく、とくにバーロウとイエール

大学の同期であったノア・ウェブスターはこの友人の転向を罵倒して憚らない。しかし、ホプキンスの「ギロチーナ」を精読するならば、ホプキンスの断固たる連邦主義的立場がブラック・ユーモアとゴシック趣味で誇張強化される一方、バーロウを裏切者とせざるを得ないコネティカット・ウィッツの友愛の有り様それ自体を疑問視し、揺るがす視座を与えてくれる。社会的使命感と民主主義による内部破裂の恐怖が奇妙に結託した時代、コネティカット・ウィッツの叙事詩もまたその二面性を孕んでやまない。

連邦主義の時代は、初代大統領ジョージ・ワシントンの死でもって終わりを告げる。代わって、1801年のトマス・ジェファソンの大統領就任と共に共和主義の時代が本格的に幕開ける。本博士論文の第三部（“The Paradoxical Epic”）は、この世紀転換を射程とし、デイヴィッド・ハンフリーズとバーロウがその「友愛の詩学」に基づきながら、来るべき国家連帯の有り様を、それぞれ『ワシントン将軍逝去の詩』（1800年／1804年）と『コロンビアッド』（1807年）においていかに夢想したかを検討する。前者は、極めて叙事詩的にワシントンを英雄化させながらも、その連邦主義に基づく階級的人種的性差の限界を露呈させる。後者『コロンビアッド』も同じくワシントンを英雄化し、その歴史的原型を南アメリカはペルーの伝説的君主マンコ・カパックに見出す。しかし重要なのは、マンコ・カパックの敵として勸善懲悪的に打倒される先住民酋長ザモルの存在だ。ザモルを、独立戦争期が発展させた「裏切りの恐怖」の強力な象徴として読むとき、『コロンビアッド』は「友愛の詩学」が孕む「矛盾」を最も強く反映させた叙事詩として浮かびあがる。

以上、全三部を通じて見えてくるのは、独立戦争期とはかくも激動の時代であったという既に見慣れた風景かもしれない。独立戦争期が与えた「トラウマ」（第一部）は、「ゴシック」として抑圧・審美化されながら（第二部）、しかしそれが「抑圧」であるゆえにその後も解決されることなく「パラドクス・矛盾」（第三部）として継承される。

無論、たとえばハンフリーズの詩を人種的排他性において批判するのは容易である。付け加えるならば、第三章でその作品『アナーキアッド』が「ゴシック化」される瞬間を見出す際、同時に指摘しなければならないのは、そのとき要請されるのは先住民の存在に対する忘却だ。その文学的審美性は倫理性と衝突する。それはコネティカット・ウィッツの出自と立場を考慮すればするほどその擁護は困難を極めよう。一方、こうした人種的側面から、たとえば第四章ホプキンスの作品に見られるジェファソンにおける黒人差別批判を、第六章バーロウの作品に見られる奴隷廃止主義と人種的共感を、それぞれ評価するのは容易い。『アナーキアッド』と『ワシントン将軍逝去の死』が、十八世紀において依然として権力を保持していたニューイングランドの名家に生まれたハンフ

リーズとトランブルを中心に書かれた一方、「ギロチーナ」と『コロンビアド』がコネティカットの片田舎の農家に生まれたホプキンズとバーロウによって書かれたことは、その社会的出自がその人種観に少なからぬ影響を与えていた可能性を示唆しているのだろう。

しかし何より重要なのは、こうした相反する要素がコネティカット・ウィッツ内部に混在していたその豊饒性を認識することによってこそ、独立戦争期という激動の時代のアメリカが見えてくる事実である。先行研究において、コネティカット・ウィッツを包括的に捉えた研究は多くない。二十世紀前半におけるヴァーノン・ルイス・パーリントンとレオン・ハワードの研究がその基礎をなす一方、その後は各詩人にそれぞれ重きが置かれるかたちで研究は進められてきた。加えて、とりわけパーリントンによって提示されるコネティカット・ウィッツの姿は、端的に言えば、「連邦主義ドワイト対共和主義バーロウ」の対立を主軸に、その宗教的政治的構造がいわば単純化され、そのイメージは今なお支配的である。さらに、ジョン・カーロス・ロウの現状認識に倣ってアメリカ研究が「ナショナリスト」と所謂「ニューアメリカニスト」に対置されると捉えるならば、コネティカット・ウィッツの「保守性」は重要だ。なぜなら、その「文化的保守性」がナショナリストに受けず、その「階級的・性差的保守性」がニューアメリカニストに受けず、双方から軽視された二十世紀的状况が浮かびあがるからだ。しかしながら翻って、本博士論文の第二部と第三部が提示する人種の問題は、彼らの作品がもつその批判性だけでなく限界も含め、彼らの詩学を再検討する際の重要な指標になるとともに、パーリントンによって固定化されたコネティカット・ウィッツの全体像を再検討する契機となろう。

従って、本博士論文は、コネティカット・ウィッツ研究においてこれまでほとんど顧みられることのなかった詩人、ホプキンズとハンフリーズに光をあてた点に独自性の一つがある。ホプキンズは、前述のとおり、1790年代のバーロウの政治的宗教的転向に対して、ウェブスターのように「裏切り」として切り捨てることも友愛の終焉として受け入れることも出来ず苦悩した人間が、その内部にいたという、より複雑なコネティカット・ウィッツの有り様を教えてくれる。また、ハンフリーズは、本博士論文の序論が詳述するように、彼らの文学的使命感を駆動させた修辭としての友愛だけでなく、もっと素朴に、しかし極めて本質的に、彼らそれぞれを引き合わせ、連帯させ、その「友愛の絆」を紡ぐ手助けをし、さらにはその若き文学者たちをジョージ・ワシントンやジョン・アダムズに引き合わせ、その作品を「建国の父たち」に伝える役目を果たした、いわば媒介者でもあった。ハンフリーズがいなければ、コネティカット・ウィッツの友愛もなく、ハンフリーズの媒介がなければ、コネティカット・ウィッツの文学が同時代知識人とわたりあった歴史的事実も有り得ない。

本博士論文の最終章は、「アメリカ辞書の父」として有名なノア・ウェブスターを対象とする。その名の流布にもかかわらず、ウェブスターが「コネティカット・ウィッツ」として認識されることはほとんどないが、前述のとおりウェブスターはバーロウとイエール大学で同期であり、

1780年代には『アナークアッド』を生むことになったハートフォードの文学倶楽部「ハートフォード・フレンドリー・クラブ」の創設期に頻繁に出入りし、その啓蒙思想と連邦主義をいかに吸収しながら、彼らとの友愛を育んだ。彼をコネティカット・ウィッツの不可欠な一人として再定置し、その代表作『アメリカ英語辞書』（1828年）を再解釈するのが本章の目的である。『アメリカ英語辞書』の重要性は、それが「アメリカ英語」の独自性および必要性を主張することだけでなく、本作がそのエントリー単語の例文に、聖書やミルトン、ドライデン、ポープ、ジョンソンだけでなく、ドワイト、トランブル、ハンフリーズ、ホプキンス、バーロウらコネティカット・ウィッツの友人達の作品からその引用が形成されている事実である。すなわち、『アメリカ英語辞書』は、ウェブスターがイエール大学やハートフォードで育んだ友愛の記憶を基盤としながら、コネティカット・ウィッツの「言葉」が、断片的なかたちではあるものの、最終的に辿り着いた場所として浮かびあがるだろう。ウェブスターをコネティカット・ウィッツの時代における「最後の記憶の継承者」として位置付けながら、その『アメリカ英語辞書』を再読することを通して、新たな「アメリカの叙事詩」の可能性を展望する。

